

あふさかの関やいかなる

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西木, 忠一 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4628

あふさかの関やいかなる

西 木 忠 一

一
伊予介といひしは、故院崩れさせたまひてまたの年、常陸になりて下りしかば、かの帚木もいざなはれにけり。(注1)

『源氏物語』関屋の巻は右のごとく語り出される。

光源氏二十四歳の冬十二月に、父桐壺院は崩御した。そしてその翌年、伊予介は常陸介として任地へ下向して行った。

ところが今、任期終えた介は帰京の途についていた。それは光源氏三十歳の秋であった。

常陸介ら一行が逢坂の関に入るその日、光源氏は「石山に御願はたしに詣でた」もうたのである。

逢坂の関については『枕草子』に

関は逢坂、須磨の関。すゞかのせき、くきたのせき。白河の関、衣のせき。たゞごえの関は、はばかりの関に、たとしへなくこそおぼゆれ。よこはしりの関、きよみが関、見るめの関。よし／＼の関こそ、いかに思ひかへしたるならむと、いとしらまほしけれ。

と見えていて、萩谷朴氏は本段冒頭に關して

清少納言自身に「夜をこめて鳥のそら音ははかるとも世に逢坂の関はゆるさじ」(第百二十九段)の代表作がある。畿内の東端にあつて、東国へゆく関門として、次に挙げる西国へゆく関門、畿内の西端の須磨と相対する。(注2)

と述べられたところである。

ところで、逢坂の関の前身に關しては『日本紀略』延暦十四年八

月十五日の条に

廢近江国相坂割

と見えるごとく、「割」(「塹柵ざんさくの所」と『令義解』に注記あり)つまり、堀や柵を設けたものであったことが知られる。しかし、その実態は明白にしたいところもあって、「機能的にも、実態としても、関とは同列に扱われない補助的なものであったと考えられる」^(注3)わけである。また、逢坂の関の施設に関しては定かにはない点が多い。だが、

九月晦日なれば、紅葉の色々こきませ、霜枯の草、むらむらをか
しう見えわたるに、関屋よりさとくずれ出でたる旅姿ども……

と『源氏物語』関屋の巻は語っていて、巻名にもなっている「関屋」
に関しては、寛仁四年(一〇二〇)十月、十三歳の菅原孝標女が上
総から上京する折に見た「清見が関」について、『更級日記』に

清見が関は、かたつ方は海なるに、関屋どもあまたありて、海ま
でくぎぬきしたり。

と記しており、また『石山寺縁起絵』には柵と小屋が描かれていて、
その小屋が「関屋」であろうと推測できる。だが、その規模に関し

てはやはり明白にしたい。

ただ、周知の『続日本紀』の伝える「鈴鹿の関」に関する記述

(1)宝龜十一年六月辛酉の条(光仁天皇)

伊勢国言、今月十六日己酉巳時、鈴鹿関西内城大鼓一鳴。(伊勢
国言さく、「今月十六日己酉の巳の時に鈴鹿関の西内城に大鼓一
たび鳴る」とまうす。)

(2)天応元年三月乙酉の条(光仁天皇)

伊勢国言、今月十六日午時、鈴鹿関西中城門大鼓、自鳴三声。
(伊勢国言さく、「今月十六日の午の時、鈴鹿関の西中城の門の
大鼓、自ら鳴ること三声あり」とまうす。)

(3)天応元年五月甲戌の条(桓武天皇)

伊勢国言、鈴鹿関城門、并守屋四間、始二十四日至二十五日、自
響不レ止。其声如二以木衝之。(伊勢国言さく、「鈴鹿関の城の
門并せて守屋四間、十四日より始まりて十五日に至るまで、自ら
響きて止まず。その声、木を以て衝くが如し」とまうす。)^(注4)

以上三項から大雑把に推測するならば、逢坂の関においても(鈴
鹿の関と同様に)「関屋」から「大鼓」の音の響く折もあり、必要
に応じて人々への伝達がなされていたようである。それらは軍事上
の目的によって多くはなされたのであろう。

『栄花物語』巻第七(とりべ野)の詮子女御石山詣の条には

京出でさせたまひて、粟田口、関山のほど、鹿の声もの心細う聞ゆ。よろづあはれに思しめされて、

あまたたびゆきあふ坂の関水に今は限りの影ぞ悲しき

とのたまはずれば、御車にさぶらひたまふ宣旨の君、

年を経てゆきあふ坂の験ありて千年の影をせきもとめなんとぞ申したまふ。

と語られているが、「関屋」に関しては何も触れていない。

但し、関谷の存否を考える場合、堀や柵が描かれているあの『石山寺縁起絵』第三巻・孝標女の「石山詣で」の場が、通説に従って十四世紀半ばごろまでに制作されたとする、その頃までの関屋の存在を想定することは許されるであろう。いま仮りに関屋の存在が肯定し得ぬとしても、『石山寺縁起絵』第一巻・第二巻・第三巻を高階隆兼筆とすると、隆兼は菅原孝標女が石山詣でを行なった寛徳二年（一〇四五）ごろには関屋は存在したとの認識であったことは確かである。

二

関屋の巻には

関入る日しも、この殿、石山に御願はたしに詣でたまひけり。

と語られていて、今回の光源氏の石山詣では「御願はたし」であったという。そこで、光源氏の須磨・明石の流謫時代に「石山寺」との関わりを作者が物語において語っていたか否かを確認しておこう。『源氏物語』に見える「石山寺」の用例は全九例。それらを次に列挙してみると、

(1) 関入る日しも、この殿、石山に御願はたしに詣でたまひけり。

(2) 石山より出でたまふ御迎へに右衛門佐参れり。

の二例が関屋の巻に見えるものであって、

(3) 見るままにめでたく、思ふさまなる御容貌ありさまを、よそのものに見はててやみなましよ、と思ふだに胸つぶれて、石山の仏をも、弁のおもとをも、……（真木柱）

(4) 「初瀬の観音、今日事なくて暮らしたまへ」と、大願をぞ立てける。石山に今日詣でさせむとて、……（浮舟）

(5) かしこには、石山もとまりて、いとつれづれなり。（同）

(6) ……母の御もとにしばし渡りて、思ひめぐらすほどあらんと思せど、少将の妻、子産むべきほど近くなりぬとて、修法読経など隙なく騒げば、石山にもえ出で立つまじ、母ぞこち渡りたまへる……

（同）

(7) ……あやしきことかな、物の怪などにやあらむと、「いかなる御心地ぞと思へど、石山とまりたまひにきかし」と言ふも、かたは

らいたければ伏し目なり。(同)

(8)「いさや。右近は、とてもかくても、事なく過ぐさせたまへと、初瀬石山などに願をなむ立てはべる。……」といひつづくるを、……

(同)

(9)大將殿は、入道の宮の惱みたまひければ、石山に籠りたまひて、騒ぎたまふころなりけり。(蜻蛉)

が関屋の巻以外の七例。(4)(5)(6)(7)(8)の五例が浮舟の巻に集中しているのであった。

以上によって、光源氏が須磨・明石において沈淪の生活を送っていた頃、『源氏物語』は「石山寺」に関して何も語りはしなかったことが明らかとなる。つまり、光源氏を「石山に御願はたしに詣で」させたのは、作者が関屋の巻を語る際に、新たに構想したものである。

さて、「御車は簾おろしたまひて、」右衛門佐(昔の小君)を召し寄せた光源氏は、空蟬への伝言「今日の御迎へは、え思ひ棄てたまはじ」をとりつがせた。人目を憚る故の「おほぞう」なる言葉は光源氏の胸中を表明する行為を許さない。一方、「昔の事忘れ」ぬ女も、何かと胸に迫るものがあった。

行くと来とせきとめがたき涙をや絶えぬ清水と人は見るらむ

と心のうちに詠ずる空蟬の思いを誰も理解してはくれぬと思うにつけても、彼女の孤独な思いはひとしお増すことであろう。

(A)おほぞうにてかひなし。

(B)……と思ふに、いとかひなし。

と、ともに「かひなし」と閉じているところに、「紅葉の色々こきませ、霜枯の草、むらむらをかしう見えわたる」華麗なる風景の中ゆえに、却って二人の男女それぞれの感じる「わびしさ」が読者の胸に届くのである。

三

石山より出でたまふ御迎へに右衛門佐参れり。

と物語は「石山」から帰京する光源氏を語っていて、あの逢坂の関で空蟬とすれ違いをしたわけであるが、「一日まかり過ぎしかしこまり」を申しあげる右衛門佐に作者の視点は移ってしまう。

わくらばに行きあふみちをたのみしもなほかひなしやしほならぬ
海

と詠じた光源氏の歌が佐を通じて空蟬に届けられた時、彼女は「今はましていと恥づかしう、よろづの事うひうひしき心地すれど、めづらしきにや、え忍ばれざりけむ」という状態で、あまりの長い年

月の隔たりが却って「うひうひしさ」を彼女に感じさせたのである。「えおばれざり」の思ひの彼女は

あふさかの関やいかなる関なれば繋ぎなげきの中をわくらん

と返歌した。「行くと来とせきとめがたき涙をや……」と胸中を一人さびしく詠じた空蟬が、いま光源氏から届けられた歌を見るに及んで感極まる思いを詠じて返したのであった。

空蟬の心が光源氏の誘い掛けによっていささか開く感じが漂う。この時点の二人はあの昔の二人に返りそうである。読者はここで物語の何らかの展開を予測するであろう。だが、逢坂の関での二人の邂逅を語る条は、見事にここで閉じられてしまう。そして、物語は

……かく生きとまりて、はてはてはめづらしきこともを聞き添ふるかなと、人知れず思ひ知りて、人にさなむとも知らせで、尼になりにけり。

と語って、河内守の懸想を避けるべく出家を果してしまったことを語って関屋の巻は閉じられていく。

そして、空蟬が二条東院に迎えられることは玉鬘の巻を待たねばならない。

光源氏が正月の衣裳を紫の上以下の六条院・二条東院の女性達に贈るのであるが、その折空蟬に贈ったのが、

空蟬の尼君に、青鈍の織物、いと心ばせあるを見つけたまひて、御料にある梶子の御衣、聴色なる添へたまひて、

と語られるもので、これによって出家後の彼女が光源氏の庇護のもとにあることが判明する。

あれほど誇りを持っていた空蟬が、おめおめと源氏に引きとられるとはどんな経緯があったのか、と思わせるような唐突さであり、空蟬像の変貌ともみてよいであろう。^(注5)

と永井和子氏が述べられたごとく、読者の予想を越える、あまりに意外な空蟬物語の結末であった。

四

『源氏物語』の成立に関する諸説が見えるが、いずれの説を探るにせよ十五帖蓬生・十六帖関屋の成立以前に、十四帖日濤標の巻は成立していなければならない苦である。そこで、本稿ではまず濤標の巻から考察することにする。

濤標の巻は光源氏二十八歳十月の、故桐壺院追善の法華八講から語りはじめ、「院の御遺言を思ひきこえたまふ」朱雀帝が、「おほかた世にえ長くあるまじう、心細きことのみ、久しからぬことを思

し」て、常に光源氏に「召し」があり、そのたびに彼は「参りたまふ」のであったことを語り行く。こうして朱雀帝退位の時を迎え、光源氏が政界復帰を果して内大臣にのぼったのは翌年二月のことであつた。

こうした濡標の巻の概要を、いま仮りに『日本古典文学全集』の小見出しによつて大雑把ながら把握すると、

- (一) 故院追善の御八講と源氏の政界復帰
- (二) 朱雀帝の尚侍への執着と尚侍の悔恨
- (三) 冷泉帝即位し、源氏内大臣となる
- (四) かねての予言どおり、明石の君に女子誕生
- (五) 源氏、明石の姫君のために乳母を選ぶ
- (六) 乳母明石に到着 明石の人人よろこぶ
- (七) 源氏、明石の君のことを紫の上に語る
- (八) 源氏、姫君の五十日の祝いの使いを遣わす
- (九) 源氏、花散里を訪れる 五節、尚侍を思ふ
- (一〇) 治世の交替に伴つて人々の動静も変化する
- (一一) 源氏、明石の君、それぞれ住吉詣でをする
- (一二) 源氏、帰京して六条御息所の病を見舞う
- (一三) 六条御息所死去 源氏、前斎宮をいたわる
- (一四) 前斎宮の悲しみの日々と朱雀院の執心
- (一五) 源氏、藤壺にはかり斎宮の入内を計画する

ということである。

この濡標の巻の、住吉詣での条における光源氏と明石の上の邂逅は、決して大きな比重をもつて語られていなかった。しかし、この二人の邂逅の「源氏物語」における意味は、却つて大きなものが存していたのである。

宿曜に「御子三人、帝、后必ず並びて生まれたまふべし。中の劣りは、太政大臣にて位を極むべし」と、勤へ申したりしこと、さしてかなふなめり。おほかた上なき位にのぼり、世をまつりごちたまふべきこと、さばかり賢かりしあまたの相人どもの聞こえ集めたるを、年ごろは世のわづらはしさにみな思し消しつるを、当帝のかく位にかなひたまひぬることを。思ひのごとうれしと思す。(濡標)

との宿曜の予言にあつた明石の姫君、その母である「明石の上」をこのまま物語の舞台から退けることは、所詮ありえないことなのであつた。なぜなら、光源氏の榮華は明石の姫君がこの世に生存すればこそ達成され得るものだからである。

作者は明石の上・光源氏とともに住吉詣でを決行するための、十分なる布石をしておえていた。それは関屋の巻における光源氏の石山詣でとは全く違つていた。

濡標の巻で住吉詣で決行の布石をいささか例示すれば

(1) 父君、ところせく思ひかしづきて、年に二たび住吉に詣でさせけ

り。神の御しるしをぞ、人知らず頼み思ひける。(須磨)

(2)……いろいろの幣帛捧げさせたまひて、「住吉の神、近き境を鎮め護りたまふ。まことに迹を垂れたまふ神ならば助けたまへ」と、多くの大願を立てたまふ。(明石)

(3)……もし、年ごろ老法師の祈り申しはべる神仏の憐びおはしまして、しばしのほど御心をも悩ましたてまつるにやとなん思うたまふ。そのゆゑは、住吉の神を頼みはじめたてまつりて、この十八年になりぬ。……(同)

(4)君は難波の方に渡りて御被したまひて、住吉にも、たひらかにて、いろいろの願はたし申すべきよし、御使して申させたまふ。(同)

などとなっている。だから、関屋の巻における石山詣では是非決行しなければならぬ理由はなかつたが、深標の巻における住吉詣では当然なざるべきであつたのである。

五

このまま放置しておけぬ末摘花・空蟬とのそれぞれの再会の巻として、作者は蓬生・関屋両巻を用意した。しかし、明石の上の場合はいよいよ物語が進展する端緒であつた光源氏との邂逅だったのに對して、末摘花・空蟬の場合はそれぞれの物語に結末をつける邂逅であつたから、両者には根本的に相違があつた。

ここで、蓬生・関屋両巻を比較してみることにする。深標の巻の

場合と同様に、『日本古典文学全集』の小見出しで對比すると、蓬生の巻は

- (一) 源氏謫居の間、人々ひそかに嘆きを重ねる
- (二) 末摘花の邸一途に窮乏し、荒廢する
- (三) 末摘花、荒れまざる邸を守り生きる
- (四) 末摘花、時代離れの古風な日常を過ごす
- (五) 叔母、末摘花に對して報復を企てる
- (六) 叔母、西国へ同行を勧誘、末摘花拒む
- (七) 末摘花の絶望 叔母來訪し侍従を連れ去る
- (八) 末摘花の邸わびしく雪に埋もれる
- (九) 源氏、末摘花の邸のそばを通りかかる
- (一〇) 惟光、邸内を探り、かろうじて案内を乞う
- (一一) 源氏、惟光に導かれて邸内にはいる
- (一二) 末摘花、源氏と対面し、和歌を唱和する
- (一三) 源氏、末摘花を心厚く庇護する
- (一四) 末摘花、二条東院に移り住む

の以上十四段に分けられていて、これを大きくまとめれば、

- (1) 人々の嘆き —— (一)
- (2) 末摘花の窮乏 —— (二) ～ (八)
- (3) 光源氏との邂逅 —— (九) ～ (一二)
- (4) 後日譚 —— (一三) ～ (一四)

となろう。次に関屋の巻の小見出しを同書によって示すと、

- (一) 常陸より帰京の空蟬、逢坂で源氏と出あう
- (二) 源氏、右衛門佐を通じて空蟬と文通する
- (三) 空蟬、夫と死別河内守の懸想を避け出家

の以上三段に分けられている。これを蓬生の巻と同様に大まとめをする、

- (1) 光源氏との出会い —— (一) ～ (二)
- (2) 後日譚 —— (三)

となろう。そこで、蓬生・関屋両巻の大まとめを比較・表示すると

	I	II	III	IV
蓬生	(一)	(二)～(八)	(九)～(二二)	(二三)～(四)
関屋			(一)～(一)	(三)

となる。つまり、関屋の巻は蓬生の巻前半において語り続けて来た、光源氏流謫中の人々の悲嘆と、末摘花邸の見るに堪えぬ窮乏のさまを語る条に相当する部分が、見事に欠落しているわけである。常陸における空蟬の生活状況に関しては、全く触れることなく関屋の巻

は語り出されていて、作者は蓬生の巻との物語の重複を避けていることが納得できるであろう。

『河海抄』は、

定家卿本源光行本には並一蓬生並二関屋也伊行本には関屋を一にたてたりそれは時代前後する也関屋巻は源氏帰京の次第常陸介上洛しける道にて源氏石山詣にあひたてまつるものなり

とする。このことに関して池田利夫氏は、

確かに河海抄の言う通りそれでは年次が逆になってしまうが、澤標から絵合へと続いていく物語に挟まれた二つの小話なので、関屋から光に読んでも差し支えはない。しかし、それぞれの結末からすれば、二人の女性の内、その将来に就いてはつきり言質を与えている蓬生巻の方をあとにした方が話を進め良いようにも読めて興味深いのである。しかしこれも、あるがままの姿でまず見るべきは言うまでもなし。^(注6)

と述べられたが、私は物語の重複を避けてⅢⅣのみを語る関屋の巻は、やはり蓬生の巻の後に位置しなければならぬと考えるわけである

蓬生の巻では光源氏の末摘花との対面がなされていて、二人の間を繋ぎ止める結果を迎えていたが、関屋の巻における光源氏と空蟬

にはそれがなされなかった。

石山より出でたまふ御迎へに右衛門佐参れり。一日まかり過ぎしかしこまりなど申す。

と物語には語られていて、この時点に至っては光源氏と空蟬の仲に進展は見られず、至極いたましい二人の邂逅となつてしまつたのであつた。

『源氏物語』五十四帖中の、至つて短小なる巻関屋にあつて

(1)御心の中いとあはれに思し出づる事多かれど、おほぞうにてかひなし。

(2)え知りたまはじかし、と思ふに、いとかひなし。

(3)わくらばに行きあふみちをたのみしもなほかひなしやしほならぬ
海

と「かひなし」が三度も見えるところにも、読者の心をいたましくさせるものが漂ってくるであろう。

六

ところで、光源氏は帰京した。京の生活に戻るのである。紫の上に再会し、花散里を訪れ、さらには、蓬を払つて末摘花を見る。そ

うすると、読者の心に強く印象づけられている空蟬は、と、読者は考え、作者は考え、空蟬と源氏とを再会させようと思う。西の方、住吉に御願はたしに出て、西の明石よりの舟を見た。東の方、逢坂の関を舞台にしようと思う。すなわち石山寺の御願はたしの途次とする。^(注7)

と玉上琢弥氏が述べられたごとく、西の方の住吉詣でに対する東の方の石山詣でが考えられたのであつた。

ここで、濔標の巻住吉詣での条における光源氏と明石の上の邂逅・蓬生の巻における光源氏と末摘花との再会・関屋の巻における光源氏と空蟬との邂逅の、それぞれの季節を確認しておきたい。

その秋、住吉に詣でたまふ。願どもはたしたはふべければ、……

(濔標)

卯月ばかりに、花散里を思ひ出できこえたまひて、忍びて、対の上^上に御暇聞こえて出でたまふ。日ごろ降りつるなごりの雨いますこしそそきて、をかしきほどに月さし出でたり。(蓬生)

九月晦日なれば、紅葉の色々こきまぜ、霜枯れる草、むらむらをかしよう見えわたるに、関屋よりさくとづれ出でたる旅姿ども……

(関屋)

と物語に見えて、秋・(初)夏・(晩)秋と季節は移されていて重複を避けている。

また、それぞれの対面の場について見ると、霧標の巻では「君はゆめにも知りたまはず、夜一夜いろいろの事をせさたまふ」のであった。つまり、明石の上も住吉に詣でていることを全く知らなかった。蓬生の巻では

入りたまひて、「年ごろの隔てにも、心ばかりは変らずなん、思ひやりきこえつるを、さしもおどろかいたまはぬ根めしさに、今まで詠みきこえつるを、杉ならぬ木立のしるさに、え過ぎでなむ負けきこえにける」とて、帷子をすこしかきやりたまへれば、例のいとつつましげに、とみにも答へきこえたまはず。

と語られていて、二人の対面はなされていた。続く関屋の巻では、……道のほど騒がしかりなむものぞとて、まだ眺より急ぎけるを、女車多く、ところせうゆるぎ来るに、日たけぬ。打出の浜来るほどに、「殿は粟田山越えたまひぬ」とて、御前の人々、道も避けあへず来こみぬれば、関山にみな下りゐて、ここかしこの杉の下に車どもかきおろし、木隠れにみかしこまりて過ぐしたてまつる。

という有様で、石山へ迎う光源氏一行を常陸介らは身を避けて「木隠れにみかしこま」っていたのである。

七

『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『更級日記』には、それぞれの作者の決行した「石山詣で」が記されていた。だが、『源氏物語』の巻名にもされた「関屋」に關しては、いずれも触れていなかった。

それは、『うたたね』『十六夜日記』『とはずがたり』などと同様であって、「逢坂の関」「関の清水」は見えても「関屋」は見ることがない。ただ、『海道記』には

小関を打越えて大津の浦をさして行く。関寺の門を左に顧みれば、金剛力士……

と見えて、『更級日記』に記されていた

(1) 申の時ばかりにたちて行けば、関近くなりて、山づらにかりそめなるきりかけといふものしたる上より、丈六の仏……

(寛仁四年十二月・作者十三歳)

(2) 関寺のいかめしう造られたるを見るにも、そのをり荒造りの……

(寛徳二年十一月・作者三十八歳)

と同様に、「関寺」に關して記していたのである。

ところで、紫式部が逢坂の関を通過したことは、『紫式部集』に

よって明らかである。それは、父為時らとともに越前国府へ向って行った長徳二年(九九五)夏と、国府からひとり帰京した翌長徳三年初冬の二度であった。その折の彼女の記憶が関屋の巻を語る際において、大きな関わりのあったことは疑えないであろう。いささかしか語らなかつた逢坂の関の晩秋の景

九月晦日なれば、紅葉の色々こきませ、霜枯の草、むらむらをか
しう見えわたるに

が、読者の眼前に強くせり上がって来るのは、彼女の記憶が深く関係していたからである。

(注1) 本文引用は『日本古典文学全集』(小学館) によつた。

(注2) 『枕草子解環』三(一五頁)

(注3) 『新修大津市1』古代・武藤直(四〇七頁)

(注4) 『続日本紀』五(新日本古典文学大系・岩波書店) によつた。

(注5) 「空蟬再会」(講座 源氏物語の世界) 第四卷・六七頁)

(注6) 「蓬生・関屋」(『源氏物語講座』第二卷・一五七頁)

(注7) 『源氏物語釈』第三卷(四五二頁)

(付) 滯標・蓬生・関屋各巻の小見出しは他にも見えるが、いずれも大同小異なので、本稿で本文を引用した『日本古典文学全